プロサッカー選手のセカンドキャリア準備に関する類型化
～進路選択準備度・自己効力・結果期待尺度に着目して～

スポーツクラブマネジメントコース
5014A309－4　小林　慎一朗　　研究指導教員：間野　義之　教授

１．緒言

我が国のプロスポーツ選手の平均引退年齢は、競馬騎手：約38歳、大相撲：約32 歳、プロ野球選手：約29 歳、プロサッカー選手：約26 歳（上代ら,2013）と、プロサッカー選手の平均引退年齢は他競技に比べ低く､選手キャリアが短いためセカンドキャリアへの準備期間も短くなる。

プロ野球では退職金と言われる入団時の契約金が存在し､大相撲では十両以上には養老金､勤続加算金という名目の退職金が支払われ、幕下以下でも年数に応じてせん別が支給されるが、Ｊリーグには退職金制度はない（上代ら,2013）。

また、Ｊリーグでプレーするプロサッカー選手の年収は、1000万円以下の選手が約７割（セカンドキャリアに関する調査,2013日本プロサッカー選手会･早稲田大学スポーツ政策研究室調べ）を占め､現役中に自助努力で引退後の生活費を稼げる選手はごく一部の選手に限られ､大半の選手は引退後の不安を抱えながらプレーをしているのが現状である。

２．　目的

本研究では、我が国のプロサッカー選手を類型化してその特徴を明らかにし、さらに各クラスター間における属性の違いを明らかにすることを目的とする。

選手への意識調査を通じて進路選択準備度尺度（以下、準備度尺度）、進路選択自己効力尺度（以下、自己効力尺度）、進路選択結果期待尺度（以下、結果期待尺度）の尺度を用いた、セグメンテーションを行いクラスターごとの特性を把握するとともに、クラスター間の比較を行い類似性と相関性を明らかにする。

３.分析方法

準備度尺度、自己効力尺度、結果期待尺度の３尺度を投入変数とするクラスター分析を行った。すべての回答者1045件のうち、分析に使用した項目に欠損なく回答した638件（有効回答率：61.1%）を解析対象とした。次に有効回答者を準備度・自己効力・結果期待を問う質問項目を基に３群に分類した、準備度尺度、自己効力尺度、結果期待尺度を使用した。すべての統計分析には、IBM社の統計ソフト、SPSS Statistics Version22を用いた。

クラスター分析に先だち凝集課程の妥当性を鑑みたうえでWard法を選択した。近接距離は平方ユークリッド距離にて分析を進めた。分析手順としてはデンドログラムを作図し、樹形図の近接距離の読み取りをおこなった。読み取りの結果、クラスター間の類似性が最も小さいと考えられる、クラスター数を「3」とし、その後の確認を行なうこととした。

４.結果

Cluster１は、解析対象者全体の28.5%を占め、準備度尺度の平均値が最も低く、結果期待尺度の平均値が最も高いことから「結果期待型」と命名した。年齢26-30歳が有意に高く（$p<0.05$）、プロ契約した年齢19-22歳が有意に低く（$p<0.05$）、年収301-500万円が有意に高く（$p<0.05$）、個人賞受賞経験者が有意に高く（$p<0.05$）、引退後のロールモデルが「いない」者が有意に高く（$p<0.001$）、教員免許取得者が有意に高かった（$p<0.01$）。

Cluster２は、解析対象者全体の36.2%を占める最も大きなクラスターであり、準備度尺度、自己効力尺度、結果期待尺度、すべての平均値が高いことから「計画実行型」と命名した。プロ契約した年齢19-22歳が有意に低く（$p<0.05$）、引退後のロールモデルが「いる」者が有意に高く（$p<0.01$）、「いない」が有意に低かった（$p<0.001$）。

Cluster3は、解析対象者全体の35.3％を占め、準備度尺度、自己効力尺度、結果期待尺度、すべての平均値が低いことから「未着手型」と命名した。プロ契約をした年齢19-22歳（$p<0.001$）と23歳以上が優位に高かった（$p<0.01$）。

５.考察

本研究の目的は、プロサッカー選手を類型化してその特徴を明らかにし、さらに各クラスター間における属性の違いを明らかに

することであった。

クラスター分析の結果、分類された3クラスターの特徴として、年齢、プロ契約した年齢、年収、個人賞受賞経験の有無、引退後のロールモデルの有無、教員免許の有無に有意差が見られた。

結果期待型は、準備度尺度が低く、自己効力尺度も平均以下の属性だが、結果期待尺度が最も高い群となった（図1）。

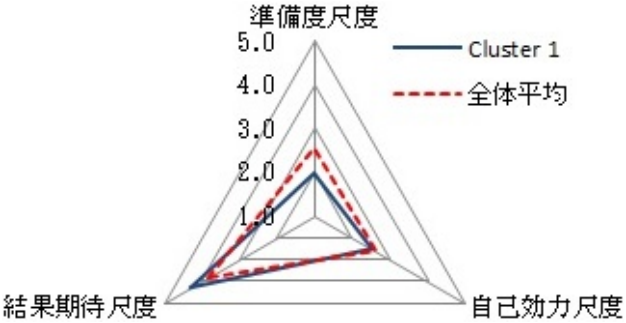

図1　結果期待型

計画実行型は、準備度尺度、自己効力尺度、結果期待尺度、全ての平均値が高い群となった（図2）。

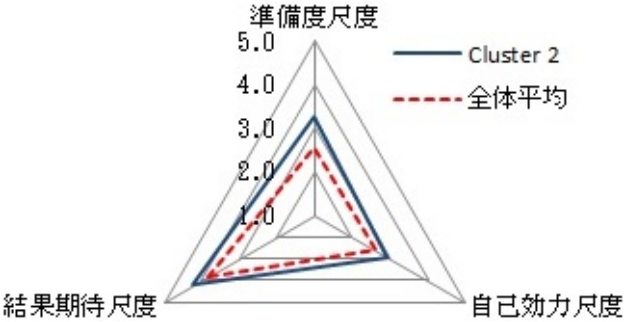

図2　計画実行型

未着手型は、準備度尺度、自己効力尺度、結果期待尺度、全ての平均値が最も低い群となった（図3）。

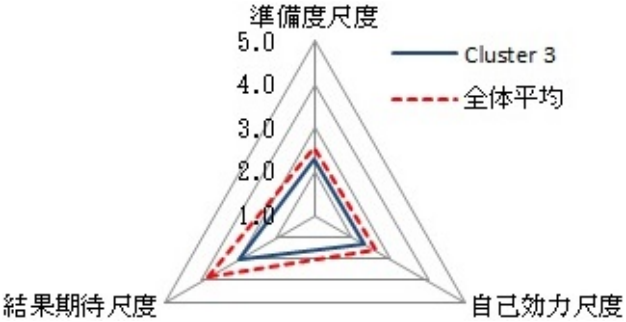

図3　未着手型

全ての平均値が高かった（図4）、計画実行型は、引退後のロールモデルが「いる」が有意に高く、Gibson（2004）のロールモデルの存在がキャリア開発や成長において重要な役割を占めていることを明らかにした先行研究一致する結果となった。

また、自己効力尺度の平均値が高かった計画実行型は、結果期待尺度の平均値も高く、自己効力尺度の平均値が低かった未着手型は、結果期待尺度も低く、浦上（1995）の自己効力が強い者は進路選択行動を活発に行い努力し、自己効力が弱い者は進路選択行動を避けたり人生の目的を達成する為に必要なものと理解していても行動おこさないことを明らかにした先行研究と一致する結果となった。

青石ら（2010）は、引退後に向けてのキャリア志向には、家族の存在が大きい影響を及ぼしていると述べており、既婚者の占める割合が高い計画実行型は、セカンドキャリアに関する準備行動を起こしている者の割合も高く、先行研究と一致する結果となった。

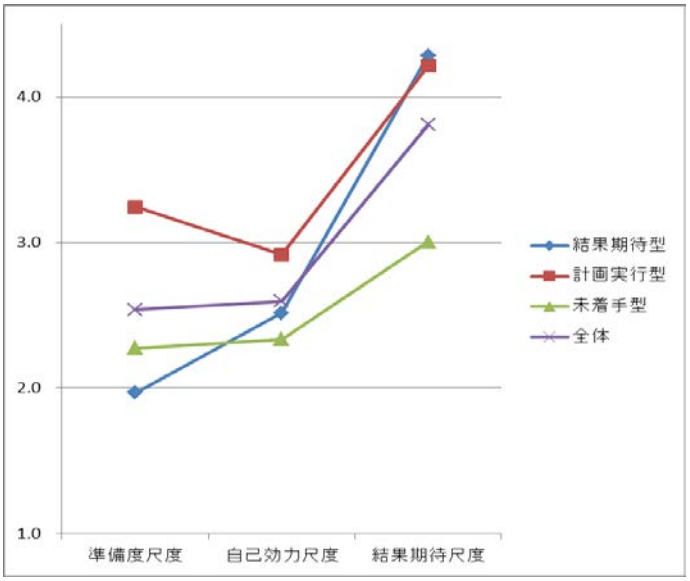

図4　クラスターごとの進路選択尺度平均点

6．結論

本研究の目的は、プロサッカー選手を類型化してその特徴を明らかにし、さらに各クラスター間における属性の違いを明らかにすることであった。階層クラスター分析の結果、3クラスターに分類され、年齢、プロ契約した年齢、年収、個人賞受賞経験の有無、引退後のロールモデルの有無、教員免許の有無において有意差が見られ、各クラスターにおける特徴が明らかになった。

7．研究の限界

今後の展望について、調査項目に関しても有意差の有無にかかわらず、どういった要因が進路尺度と関連性があるのかを明らかにする必要がある。さらに本研究では、調査項目を個別で分析しているが「どの項目が、どの尺度に影響しているのか」という「調査項目×進路尺度」の関連性を明らかにすることが必要であり、さらなる研究の蓄積が求められる。